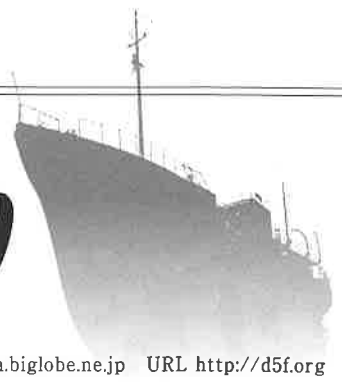


2016.05.01  
No.393  
(5・6月号)

# 福竜丸だより



発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内  
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



大きく花をつけた八重紅桜のもと参加者はエンジンを囲み、核廃絶と平和への希いをつないで幕を閉じた

## 船を守り遺した人びと、 第五福竜丸の航海を支える人びと

— 開館40年にあたって

第五福竜丸展示館の開館した当初、夢の島公園は一部開園しましたが、まだ整備中の区画が多く、現在の東京スポーツ文化館の前身、総合体育館の開館はその年の一〇月、交通機関はなく地下鉄東西線の東陽町駅から徒歩か自転車、タクシーで来るしかない状況でした。

ん。第五福竜丸が夢の島に存在しつづける意味もそこにあります。

四〇年後のいまは、新木場駅にJ R京葉線、メトロ有楽町線、りんかい線が通り、都バスの便もあります。スポーツ公園、イベント会場として、特徴ある熱帯植物館と大きな森のような夢の島。かつてのゴミの島の埋立地の面影はありません。

船を守った人、遺した人(東京都)、展示館からの発信を担う人、サポートする人。何を伝えともに学び、考えるのか、その大切な事実を船体と資料で語り伝える場所。希少な木造船の資料として保存された福竜丸、産業遺産と平和遺産を次の世代につなぎたいと思います。人びとの希望を乗せて第五福竜丸の航海はまだまだつづきます。

しかし一方、核の問題は依然として世界的課題であり、新たな脅威も懸念される昨今、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニが継承すべき核兵器がもたらす破壊とその非人道性、被ばくによる苦しみ永続性は変わるものではありません。

六月一〇日の開館の日にむけ展示館では、記念事業として四〇年をたどる、「福竜丸と展示館」の年表・解説、核実験年表を盛り込んだ記念誌を発行します。

常設展示の一部リニューアルをおこない、企画展として「写真と資料でたどる四〇年」を準備しています。皆様のご来館を心からお待ちいたします。

## 開館四〇年メッセージ 第五福竜丸を忘れない

坂口 良春



澄んだ青空に「原ばく水ばくはいりません ノーモアヒロシマ ナガサキ ビキニ」と書かれた四五枚の連風が、高々と舞い上がりました。一九八二年一月二五日、毎年「成人の日」の恒例行事となっていた平和を願う「新春風あげ大会」(主催・第五福竜丸平和協会 後援・東京都)で一位となった江東区立北砂小学

校六年二組の連風です。

一九四五年三月一〇日の東京大空襲で焼け野原となった江東区。戦後の復興で大小の工場や住宅が建ち並び、やがて高度経済成長期を経て、移転した工場跡地に大規模な集合住宅が建設され、次第に人工が密集し学校もつくられました。そんななかの一つが私の勤務校だった北砂小学校です。校区とその周辺は、地域がらあちらこちらに戦災の慰霊碑や地蔵が見られ、教師たちはそれらを平和学習の教材としても積極的に取り上げていました。また、学校からそれほど遠くなく、同じ江東区内にある第五福竜丸展示館の見学や、そこでのさまざまな行事にも参加する機会がありました。

本当にあがるの…

風あげ大会に初めて参加し

たのは文頭で紹介した前年、五年生の学級でした。ファミコンゲームが流行り始め、風作りなどにはほとんど興味を示さなかった子どもたちでしたが、それでも一人一枚、三枚の連風をなんとか作りあげました。風あげ大会に参加するということで作ったものの「本当にあがるの…」「少しでもあがれば」と、不安と期待で当日を迎えることになりました。

そして始まった風あげ、恐る恐る繰り出した風糸が一気に引かれ、風にのった連風は晴れた空にぐんぐん吸い込まれていきます。子どもたちの歓声がいっせいにあがったのはいうまでもありません。この年の風あげ大会は約五〇組が参加しましたが、さて表彰式、ここでまた思いもよらないことに、なんと見事に優勝をしてしまったのです。いっしょに参加してきた父母も大喜び、賞状とたくさんの賞品を手を意気揚々と全員で展示館を見学しました。

前年とは違う意識が

翌年、六年生では社会科の

授業で広島・長崎とともにビキニの水爆実験、実際に目で見て身近となった第五福竜丸について学習、スライド『太陽が落ちた 広島・長崎・福竜丸』(東京都教職員組合制作)などで深めていきました。

風あげ大会が近づくとつれて風作りにも次第に熱がはいり、さらに「第五福竜丸はビキニで被爆した」「今年も絶対に優勝する」この二つが前年とは違った意識として子どもたちにかがえましました。

「明けましておめでとう」とかかれていた連風の文字は、話し合いで「ノーモアヒロシマ ナガサキ ビキニ」を入れることが決められ、出来上がった連風は見栄えも作りもよりしっかりしたものになっていました。

多少の自信と余裕をもって迎えた当日、三二枚から四五枚に増えた連風は高空に高々と舞い上がりました。風糸の強力な引きとそれに必死に抗した子どもたちは、前年に続き再び優勝することができました。

卒業が近づいた頃、記念に残したいと、子どもたちは新

しい連風を作ります。風上げ大会にむけて取り組んできたさまざまな思いを胸に「第五福竜丸を忘れない」と文字が入れた連風は、風あげ大会の時の大きなパネル写真とともに、展示館にしばらく飾られました。

六年生が卒業し、新しく受け持つことになった学年では、連風の枚数も少しずつ増やして一〇〇枚、一五〇枚に挑戦したり、グループごとに工夫した風を作ったり、風あげ大会への参加を毎年の学級行事としていきました。

\*

第五福竜丸展示館の「新春風あげ大会」への取り組みが、子どもたちの心に残る感動や、平和への思いが育まれるきっかけになるよう願っての実践でしたが、三十数年前の記憶の定かでない部分も多く、本稿をまとめるにあたっては『平和教育の12か月』(一九八四年東京都教職員組合編)「風あげ大会に取り組むなかで・坂口実践」を参考にしました。

(さかくち よしはる/元小学校教諭)

# マーシャル訪問記

武本 匡弘

## 子どもに伝える

マジユロに着いた初日に早速リミヨ・エボンさんの自宅を訪れました。英語版サンプルをお渡しした時のリミヨさんの驚きよう、喜びようは忘れられません。

「学校で教えようにも教材がない、プラボーの事さえ知らない子どもが多い。」と、小学校教員だったリミヨさんの言葉からマーシャルの現実を知ります。

図書館などで原水爆実験に関する書物を調べましたが、驚くほど見当たりません。子どもにも分かりやすい絵本など

二月二四日から三月五日まで、今回で三回目のマーシャル訪問は、いくつかの目的を持って出かけました。  
①「ビキニふくしまプロジェクト」が制作した写真絵本『ふるさとにかえりたい〜リミヨおばあちゃんとヒバクの島』（島田興生・写真、羽生田有紀・文）の英訳版発行に向け、この本の主人公リミヨさんとの校正作業を行う。②その販売、普及に向けての意見や情報の収集。③三月一日ビキニデー（マーシャルではNuclear Victims Remembrance Day＝核被害者のための記念日と呼び祝日）七〇周年式典への参加などです。



見事なハーモニーの合唱で行進する学生たち 撮影筆者

どは皆無と行ってよいのではないかと思えます。この写真絵本ほど求められているものはないのではないかと、という気持ちに迫られました。リミヨさんの「あなた達は本当に良くやってくれました。」という言葉は、このプロジェクトに関わる全ての方々の心に届くものであると思います。

## 核被害者記念式典

マーシャルでの原水爆実験開始から七〇年。式典での米大使館大使の挨拶には強い違和感をおぼえました。

「アメリカは、大戦以降もベトナム、朝鮮、イラクなど世界平和のために多くの自国民が犠牲を払ってきた」という話。そして、マーシャルには「アメリカは十分な補償を行っている」というもの。当然謝罪の言葉はありません。

それに対し、被ばく者代表リミヨさんのスピーチは特別な響きを持ち、心を揺さぶるものでした。政府関係者、来賓などの全員が正面の聴衆に向かつてのスピーチだったのに対し、リミヨさんは、何度

も壇上の関係者を振り返り、語りかけ、疑問や怒りをぶつけ、そして心の底から訴えるようなものだったのです。

もう半世紀以上にもなる故郷を追われた人々が未だ避難を強いられている現実。「平和のためには犠牲も必要」という強い違和感のある言葉。

ふと日本を振り返り、これは他人事ではないという事を感じたのでした。

## 希望を紡ぐ女性・若者

翌日はビキニ島民の避難先メジャト島での式典にも参加し、幾人もの政府要人のスピーチ、直接のお話などを聞くことができました。しかし、七〇年もの年月が重くのしかかり、永すぎる苦しみ、被ばくや、生活様式、食習慣などの変化から受ける健康問題、そして年々減っていく元島民被ばく者達の姿などから、なかなか希望が見えてこないように感じました。

そんな中、マーシャルで初めて的女性大統領の誕生は新しい風を感じさせました。また、マーシャル大学で教鞭をとる詩人のキャシー・キジナ

ーさん。彼女が国連で行ったスピーチとマーシャルの窮状を訴える内容の詩の朗読は、参加者が総立ちになる喝采を浴び、言葉にならない程の感動を与えてくれました。マジユロに住む一八歳セリーナ・レームさんは、フランスで行われた「COP21パリ協定」で堂々としたスピーチをしています。

そしてマジユロの大学で学ぶ若者達、式典で素晴らしい合唱行進を見せた学生の姿。マーシャルで生まれ育ち学ぶ若者たちの姿こそ、この国の長く苦しい歴史から生まれる新しい「希望」であると確信できた旅でした。

（たけもと まさひろ ビキニふくしまプロジェクト会員。六月八日よりヨットでマーシャルまで航海の予定）

\*

ビキニふくしまプロジェクトでは『写真絵本ふるさとにかえりたい』英語版出版にむけて基金をよびかけます。一〇〇〇部作成しマーシャルの人たちにも普及する予定です。問い合わせはプロジェクトまで。bikini31@gmail.com

「エンジン」と「PL法」

田中里子さんのこと

工藤 爽子



01年の初めてのつどい

雨もよいの四月三日だったが、長持ちしていた八重紅大島桜は満開、第五福竜丸展示館で開かれたお花見平和のつどいには、一九〇人が集った。主催の第五福竜丸から平和を発信する連絡会の構成団体では高齢化などの理由で、一五回目の今年で一区切りという、最後のお花見平和のつどいになった。

思い返せば一六年前の二〇〇〇年一月、三重県熊野灘の

海底から引き揚げられ、三二年ぶりに船体と同じ場所に運ばれてきた第五福竜丸のエンジンを迎える「第五福竜丸エンジン・お帰りなさい集会」が開かれた。大漁旗はためく中、ホルンの音を合図に「お帰りなさい！」と大きく手を振っていた田中里子さんが、今も目に浮かぶ。

お名前だけは知っていた田中里子さんと初めて会ったのは、九〇年代初頭、名刺には東京地婦連常任参与とあった。きっかけは印刷所の紹介で東京地婦連の機関紙『婦人時報』の編集を引き受けることになったからだが、私は夫を手伝って、大石又七さんの『死の灰を背負って』（新潮社刊）を上梓した年だった。船を通してこんなに太い糸が結ばれるとは、考えてもみなかった。

以後、毎月一回、渋谷の全国婦人会館に原稿を取りに行き、田中里子さんと話す機会になった。

学徒動員で田中里子さんは和紙とコンニャクで風船爆弾を作っていた。一九七八年の第一回国連軍縮特別総会では

日本のNGO代表として、平和の大切さを訴えるスピーチ、峠三吉の「にんげんをかえせ」で締めた。また、ちふれ化粧品誕生などにも尽力されたが、私がリアルタイムで知っているのは、第五福竜丸エンジンを・東京夢の島へ都民運動とPL法だ。

二〇〇〇年八月に発行されたエンジンの『都民運動の記録』は、田中里子さんから依頼されて都生協連の水越雅子さんとまとめの作業をした。

海底から引き揚げられたエンジンを東京に運んでくると初めて聞いた時、まず運送代が頭をよぎった。一二・五トンもあるエンジンを和歌山県から東京まで、しかも各地で展示しながらひと月近いあの大きなエンジンの旅――。

田中里子さんが「エンジンを東京まで運んでくること」にかかわっているのは知っていたが、難なくやってのけた。それだけだった。きつと長い間に培った豊かな人脈があったのだらう。

田中里子さんはPL（製造物責任）法制定にも熱心だった。誰も取り上げてくれな

満開の桜の下 お花見平和のつどい開く

四月三日、一五回目となる「お花見平和のつどい2016」が開かれました。

一九九六年二月、福竜丸のエンジンが三重県熊野灘（七里御浜）から引き揚げられ、第五福竜丸のもとに届けようとの和歌山県民運動の要請を受けて、東京



の市民団体が「第五福竜丸エンジンを夢の島へ、東京都民運動」を発足させ、各地をリレーして移送し展示館前のひろばに展示が実現しました。

「つどい」では、その経緯を地婦連、生協、原水協、被爆者の会が報告し、平和協会はエンジンの現況について説明しました。

午後は、満開の桜のもと参加団体から平和への思いと取り組みがそれぞれ語られました。最後に参加者全員でエンジンを囲み、再会を願いながら終わりました。

つたという、福島県の喫茶店オーナーの「業務用冷凍庫から出火した」の訴えに、メーカーの過失が認められて損害賠償が命じられるまでをサポートした。

当時の『婦人時報』にこの冷凍庫裁判傍聴記を掲載したが、平易な文章で興味を抱かせる内容の記事で、次号を心

待ちにしていた記憶がある。二〇〇七年、この年には新井満氏の訳した「千の風になつて」が話題になり、流れていた。

三月二八日、田中里子さんは、万葉の桜の中をひとひらの花のように旅立った。田中里子さんのお墓はない。（くどい）さわい／編集者

## 新井卓写真集に木村伊兵衛賞

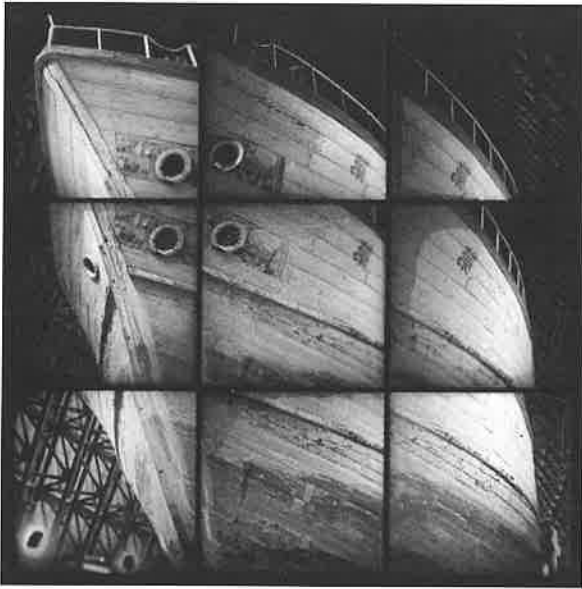
## ダゲレオタイピストに祝福を

岡村 幸宣

## 鏡の向こうの淡い影

初めて新井卓の写真を見たのは、二〇一一年春、三軒茶屋のKENという地下の薄暗い空間だった。写真最初期の技法ダゲレオタイプによって写しとられた、シャールの中の第五福竜丸に降り注いだ放射線降下物、いわゆる「死の灰」。

撮影したのは、二〇一一年三月一日の午後。大地がき



新井卓プロフィール 1978年川崎市生まれ。国立近代美術館、森美術館、ボストン美術館などでの展覧会に参加。昨年展示館で「竜の鱗—アトミックエイジのモニュメント」展。写真集『MONUMENTS』B5判変形函入160頁、価一万円、フォト・ギャラリー・インターナショナル刊

しみ、唸りをあげた瞬間——やがて、核という名の制御不能の怪物が、囚われの檻から解放されることになる発端のときに、撮影に取り組んでいたと聞いた。

そんな運命的なエピソードとともに、印象に残ったのは、デジタル技術が進化を極める時代にあつて、銀板を鏡面になるまで磨きあげ、直接カメラに入れて露光し、さらに水銀蒸気を用いて現像するという丹念な工程。何より、そうして生み出された写真の神秘性に、心を惹かれた。

目を凝らして見ようと近づけば儚く消えてしまふ、現実でありながら幻想のような、鏡の向こうの淡い影。その後も錬金術師を仰ぎ見るような思いで、彼の魔術的な手わざを追いつけた。

## 核の歴史を記憶する旅

あれから五年。第五福竜丸、福島、そして広島、長崎、米国トリニティ・サイトへ。彼は、人間と核の歴史を見つめ、記憶する旅を続けている。芸術には、究極の美や先鋭的な表現を拓くだけでなく、

目の前の現実の奥に潜む「芸術的真相」を探求し、人びとの前に差し示す役割がある。福島県飯館村の野に咲いた白いヤマユリ、一時二分を指し示す長崎の時計、広島市上空高度五七〇メートルに上った太陽。「多焦点」の連なりから浮かび上がる第五福竜丸、原爆ドーム……昨春秋に刊行された写真集『MONUMENTS』（フォト・ギャラリー・インターナショナル発行、限定一〇〇〇部）には、そうした旅路の果てに彼が拾い集めた、秘儀の啓示の数々が収められている。それらは時間の経過とともに忘却され、消滅していく力に抗すための、「極小のモニュメント」だという。

## 忘却に抗する系譜

古来より人は、大切な記憶をつなぎとめ、世代を超えて伝え残すために、さまざまな工夫を凝らしてきた。それは壁画や絵巻であったり、あるいは叙事詩や民譚みんたんであったりした。

七〇年前、人類は禁忌の扉を開いてしまった。この地球

上のあらゆる生き物が、否応なく、核の脅威と隣り合わせに生きる時代。その痛みと悲しみは、私たちの記憶に刻みこまなければならない。

記憶はやがて預言となる。だからこそ、忘却を誘う力は根強く、手ごわい。それに抗するための「モニュメント」もまた、美しく、したたかなでなければならぬ。例えば丸木位里・丸木俊夫妻の《原爆の図》のように。ベン・シャールのペン画のように。林光の練り上げた旋律に乗って歌われる、原民喜の詩のように。新井卓のダゲレオタイプも、そうした系譜に連なる。

彼が選び取った道は険しく、果てしなく続くだろう。必ずしも報われる任務ではないかもしれない。

だからこそ今は、木村伊兵衛写真賞という最高峰の榮譽を授けられたことを喜びたい。

ダゲレオタイプに祝福を。真実を求める者に、幸いあれ。

（おかわら ゆきのり／原爆の図丸木美術館学芸員）

## 見崎漁労長を偲ぶ 波のように何度も立ち上がる人生を想う

木村 力

私は明るい光の中で誰かと楽しく話す夢を見た。鮮烈な夢だったが内容が思い出せない。話し相手が焼津の人であったことは覚えていた。ぐったりと疲れた寝起きに体の不調を疑うほど、珍しい出来事だった。起床後間もなくして、第五福竜丸の元漁労長見崎吉男さんの計報が届いた。

前夜(三月一七日)午後一時二〇分、焼津市内の病院で息を引き取ったという。夢

一九九二(平成四)年夏、私は静岡新聞の記者として焼津に赴任し、見崎さんや久保山すずさんを初めて訪ねた。

焼津は私の祖母の出身地であり、小泉八雲や鰹鮪の遠洋漁業、そしてビキニ事件ゆかりの地として意識していた。

当時、見崎さんは総菜店を営んでいた。初対面は重苦しい雰囲気だったが、機会があれば心のうちを聞かせてほしいと伝えた。その後、すずさんの計報やビキニ事件四〇年の取材を通じて再三、見崎さんに会った。焼津を離任する際、「話す時はあんたに」と



2011年5月焼津市民と来館した見崎さん(撮影・島田興生)

夢の島に放置の福竜丸が報じられ、見崎さんは甲板の上でインタビューを受けた。(1968年3月27日付朝日)



十四年ぶりの対面  
感慨ひとしお元漁労長

事件半世紀を前にその機会が訪れた。「こりやあ難しい話だでなあ、重いこんだもんで」。

海辺を歩きながら、見崎さんは「一生の重荷」という記憶を語りだした。

二八歳の若さで人生が暗転。冷戦下での政治的対立、平和運動の分裂や社会の偏見に翻弄されながらも、筋を通して生きた人だった。

「当時、わしも『漁士』以外生きる道はなかった。乗る船がなくなつた時、経歴を抹消し一切秘密にして新しい船員手帳を作ってもらつてね。そういうことをしたいと思つたよ」

それでも、船の責任者として

て集會に招かれれば、人前に出て平和の大切さを訴え続けた。漁師を「漁士」と称した誇りと責任感、自責の念を強く持ち続けた人である。

私は乗組員の方々の心情を取材した「第五福竜丸 心の航跡」を連載し、手元に残つた見崎さんの手記や資料も『千の波 万の波』として仲間と本にまとめた。

海が好きだった見崎さんと、折に触れて青い海を望む喫茶室でもやま話を花を咲かせた。見崎さんはいつもコーヒーにミルクと砂糖を入れておいしそうにすすりつつ、のんびりおしゃべりを楽しんだ。その笑顔が今も印象に残っている。

そんな茶話会が七年ほど続いたが、東日本大震災の年に連絡が途絶え、それきりになった。

歴史的事件の渦中において、半世紀以上も世間の耳目にさらされながら、自分を見失わ

なかつた希有な人だと思つた。芯が強く、心の広い、深い愛情を感じさせる人だった。

見崎さんの手記にある「千の波 万の波」は、見崎さんが菩提寺の墓の石碑に波模様とともに刻んだ言葉と呼応する。

「だれにだって 風の日も雨の日もあらしの日だってあるさ 大切なのは夢をしっかりと抱きしめて いのちいっぴい生きたか 波のように何度も立ち上がったかだ」

今もあの声が聞こえるような気がする。見崎さん、ありがとうございました。

### 見崎吉男さんの横顔

1925(大14)年11月焼津市に生まれる。高等小学校を卒業、16歳で福積丸の乗組員に。戦後、三崎漁港などで修業、54年、28歳で福竜丸の漁労長に。55年退院後は焼津市内でアパート経営、惣菜店など。船のトップとして事件の処理、入院中の乗組員の将来などについて心を砕く。

(きむら ちから／元静岡新聞記者)



連載㊦

晴れた日に  
雨の日に

山村茂雄

〈承前〉

一九八一年六月一三日に開かれた「忘れまいぞ『核』問題討論会」(第一回)のテーマは「みんなで考えよう核兵器持ち込み」でした。

五月一日、ライシャワー元米大使は、核兵器を積搭載した米艦船・航空機の日本領海・空の寄港・通過は核兵器の持ち込みに当たらないとの日米口頭了解が存在し、米艦船は核積載のまま日本に寄港と発言、岸元首相もこの発言を肯定し、核持ち込み問題に世論が沸とうしていました。

会は、最初に中林貞男さんが会を開くに至る経過(前号紹介)にふれたあいさつを述べ討論会が始まりました。

問題提起者は、福島新吾さ



第14回82年9月の討論会

ん(専修大学)と服部学さん(立教大学)、ともにライシャワー発言にふれ、「非核三原則」を崩して核兵器持ち込み公然化にすすむ危険を指摘しました。この日の進行役の陸井三郎さんがアメリカの「核の傘」という言葉が使われるようになった経過を説明し、つづけて唯一の「加爆国」がある以上、唯一の「加爆国」がある。日本政府が非核三原則を言うのであるなら、「加爆国」は核持ち込みを遠慮すべきと言うべきだ、と発言しました。いま何が問題か参加者の討論も活発でした。

この日、原水爆禁止世界大会準備委員会は、非核三原則の法制化を訴え東京・渋谷駅頭での街頭宣伝に取り組みました。行動に参加した人から、

ビラを配っても取ってくれる人も少なく、関心も薄いという感想なども出されました。

\*

中野好夫さんの発言。「渋谷での反応が心もとないというお話でしたが、これはいつでもそうで、それはやむをえないことです。いろいろの団体の方もお集まりですが一方で運動はすすめながらやはり知識というものは力なんですから、根気よくこういう場をつづけることが必要です」と参加者を励まし継続を呼びかけました。

大友よふさんは、意見を交わし合うことの大切さを話し、かつて原水爆禁止運動をやったということで「アカ」だといわれ、埼玉県婦連会長追放運動をやられたことをふりかえり、次のように結んで笑いを誘いました。

「しかし、婦人は利口ですよ。相手が完全に負けて、それ以後、わたしを「アカ」と言わなくなりました。むしろわたしは「シロ」です」(大友さんは立派な白髪です)。

関屋綾子さんが「今の世の流れにひるまずすんで

まいりましょう」とのべ討論会は終わりました。この日の参加者は約七〇名でした。

\*

何が問題か、われわれに何ができるか——この問いかけを掲げての「忘れまいぞ『核』問題討論会」の第二回は七月一日「核戦争の危機を考える」をテーマに問題提起者は(以下敬称略)関寛治(東大)、小野周(群馬大学長)。第三回は九月二十四日「中性子爆弾——その危険を考える」陸井三郎(評論家)、安斎育郎(東大)。第四回は一〇月二十九日

「核のカサ」と核戦争の危機を考える「中野好夫(評論家)、古在由重(哲学者)、小出昭一郎(東大)。第五回は十一月二五日「被爆問題と世界の非核化運動」肥田舜太郎(被爆者・医師)、伊藤成彦(中央大学)。第六回の一二月二日は「参加者による討論」でした。

\*

「忘れまいぞ」討論会は八月をのぞいて月一回、一九八四年七月まで三五回開かれました。問題提起者は前出をのぞき、加藤周一、鴨武彦、宮

崎繁樹、中野孝次、藤田省三、清水和久、前田寿夫、松岡英夫、青木日出雄、田中克彦、古在由秀の各氏や、来日中のウィルフレッド・パーチエツト氏も迎えています。八二年二月の加藤周一さんの会には入りきれない二〇〇人が来場しました。会は午後六時から九時、高齢者から中高生までの参加者が、同じ聴衆側の席に座って討論する光景は得難いものでした。中学生から「いまのおじさん」と質問をうけて、古在さんが相好をくずす、そんな場面もありました。

会費は五〇〇円。会場は主に渋谷の「全国婦人会館」。案内は前回までの参加者名簿での通知と新聞紙上の「催し」。「短信」欄のみでしたが、参加者は平均五〇名、延べ二〇〇〇人をこえています。

連絡先の原水爆禁止資料センター(準備会)は、ストックホルム国際平和研究所が発行する年鑑「世界の軍備と軍縮」を要約した小冊子の邦訳発行など、核問題の資料の提供を図るために陸井三郎、服部学両氏を代表に一九七七年に発足していました。

## 福島・マーシャル・タヒチの核被害者ら来館

3月30日、マーシャル諸島、タヒチ、福島の核被害者が来館しました。

訪れたのは飯館村出身でNPO法人ふくしま新文化創造委員会代表理事の佐藤健太さん、マーシャル諸島エニウェトク環礁在住のブルック・タカラさん、「マーシャル諸島における放射能の影響を人類に伝達する運動(REACH-MI)」のデズモンド・デューラトラムさん、タヒチでのフランスの核実験にダイバーとして従事したミシェル・アラキノさんの4人です。

4人は国際NGOピースボートの船上で行われた太平洋ピースフォーラムに参加し、太平洋地域での核被害について乗船者らと議論を重ねてきました。

\*

マーシャル諸島の2人は、自分たちの核被害を象徴するブラボー実験が日本で大きく取り上げられてきたことに感激し、同じ実験で日本に起きた被害に衝撃を受けたようでした。太平洋の放射能汚染を示した地図の前では、マーシャル諸島周辺だけでなく太平洋全域に及ぶ被害に憤りを見せました。

ブルック・タカラさんは、母親として汚染された環礁で子どもたちを育てていくことへの苦悩を抱えてきました。ブルックさんの夫が首長を担う部族では、伝統的にエニウェトク環礁北部の島で暮らしてきましたが、故郷の島は44回にわたる核実験により汚染され、現在でも立ち入ることはできません。米国は環礁内の汚染についての情報を一切提供せず、住民は第三者機関による調査を実施しようと動いています。

デズモンド・デューラトラムさんは2010年から大統領府で気候変動政策を担当、その後被ばく問題に関するNGOを立ち上げました。広島・長崎の被害については米国の大学で学んだというデズモンドさんは、遠く離れた日本、タヒチにも同じ核被害が存在することを知り、マーシャルは孤立してはいないと実感したと話しました。

タヒチのミシェル・アラキノさんは1981年からフランス軍に雇用され、礁湖に潜り実験装置の設置や実験後のサンプル採取などを行う仕事に従事しました。リスクはないという仏政府の説明に反し、85年に消化器に異常が発覚、軍の病院で治療しました。自身の健康への影響は覚悟していたが、放射能被害について学ぶ中で、子どもたちにまで影響があるということを知り衝撃を受けたと話しました。

ミシェルさんの2人の子どもは、それぞれ腸と甲状腺に問題を抱えています。

\*

4名は4月2日に東京大学でひらかれたシンポジウム「核被害者と考える民主主義」に登壇し、現地の様子と被害について報告しました。その中で佐藤健太さんは、健康への影響だけでなく文化の喪失やコミュニティ内の確執といった形で現れる被害が各地で共通していると話しました。放射能に対する見解の違いや賠償の有無から起こる住民の分断は、被害者同士で支え合う感情を奪い、被害と闘うことを困難にしているといえます。

こうした核の被害に対して、被害者同士の連携が求められています。被害

地をつなぎ相互に助け合い、経験を共有することが重要だと感じました。

太平洋を本来の意味である平和的(Pacific)な海にするため、被害者同士の交流が続けられています。



\*左からアラキノさん、佐藤さん、デズモンドさん、ブルックさん

## 核実験年表リニューアル

常設展示の核実験年表を2016年1月分まで更新しました。本来増えてはならない核実験情報ですが、残念ながらいまなお「更新」が続きます。年表には核なき世界へ向けての動きなども記載しています。

第五福竜丸と展示館年表もリニューアルに向けて作業中です。

## ご寄贈 ありがとうございます

静岡英和女学院高校放送部元顧問の北野豊さんより、1997年に同放送部が第五福竜丸漁労長・見崎吉男さん、船主・西川角市さんの長女・一枝さんにインタビューした作品「私と第五福竜丸」録音CDをいただきました。

